

## 6章

●6章から19章までに記されていることは、「患難時代」に起こる事です。いわば、教会が携挙された後に起こる出来事です。ですから、自分には関係がないと言って聖書の啓示を軽んじ、学ぶことをやめてはなりません。むしろ、聖書全体の真理を知ることが、神を知ることでもあるのです。実は、この第6章から解釈が分かれるところで、少々、難しくなります。

●さて、5章1節で、ヨハネは御座にすわっておられる方の右の手に巻き物があるのを見ました。そこには内側にも外側にもいっぱい文字が記されて、七つの封印で封じられていました。その「封印を解くにふさわしい者はだれか」と叫ぶ御使いの声に対して、小羊が近づいて、御座にすわる方から方の右の手から、その巻き物を受け取ります。

●6章～8章にかけて、小羊によって、「七つの封印」がひとつひとつ解かれていきます。

「また、私は見た」—4章、5章でヨハネが見たものは天上の光景でしたが、6章以降は地上での出来事です。ヨハネが見た一つ一つの事柄が記されて行きます。6章から始まる「七つの封印」が解かれる出来事は、患難時代の前半の三年半に起こる事だと考えられます。患難時代は特にイスラエルのために定められた時代です。

●ダニエル書9章によれば、患難時代が始まる頃に、反キリストが出現し、不信仰のイスラエルと七年間の契約を結びます。ところが、契約半ばにしてその契約を一方的に破棄し、イスラエルの民を迫害するようになります。

黙

6:2 私は見た。見よ。白い馬であった。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。

●【**第一の封印**】が解かれて出て来たのは、「**白い馬**」です(6:2)。—これに乗る者は、弓を持ち、冠を与えられて、勝利の上上に勝利を得ようとして出て行ったとあります。「白い馬」という表現は黙示録の19章に2回出てきます(11, 14節)。そしてそれらはキリストのことを指していることは明瞭です。しかし、6章の「白い馬」はそうではありません。6章の「白い馬」は惑わしです。「白」は神の色、聖さの色ですが、サタンは光の御使いにさえ変装できるのです。人々を惑わす天才です。ですから、「白」は人々を欺くための偽装なのです。そして、その白い馬の騎手は反キリストです。その騎手は弓を手に持っています。この「弓」はこの箇所にはしか使われていない「トクソン」τοξονです。なぜ、「弓」なのか？ 弓は、遠くにいる敵に向かって矢を放つためのものであることを考えると、その影響力が非常に広い範囲に及ぶことを意味していると考えられます。

●イエシュアは「世の終わりの前兆」(マタイ24章)で話された中で、最初に口から出たことばは、「惑わし」です。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現われ、「私こそキリストだ。」と言って、多くの人を惑わすでしょう。」と言われました。反キリストは七年におよぶ患難時代の初めに、世界的な勢力を握るようになります。神の選びの民であるユダヤ人も反キリストを自分たちのメシアだと信じてしまうのです。そして七年間の契約を結びます(ダニエル9章27節)。

●イスラエルの民が反キリストをメシアとして信じるためには、それなりの理由がなければなりません。患難時代が始まる世界では、混乱する世界の苦境から平和的な解決によって救い出してくれるような、超人的な為政者を求めるような状況になります。しかもそれはだれもが忠誠を誓うことのできる人物として登場します。その人物は世界中の

人々から王(支配者)として認められ、正義と平和を実現する者として勝利の「冠」を与えられると考えられます。

●新約聖書には「冠」を意味することは二つあります。一つは最初から王(支配者)としての「冠」(「ディアデーマ」 διαδημα)で、黙示録では12章3節、13章1節、19章12節で使われています。もう一つの「冠」は勝利の冠のように、価値あることをした者に与えられる「栄冠」(「ステファノス」 στεφανος)です。それが黙示録6章2節で使われています。「彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。」とは、次々と難問を解決しながら、多くの人々から勝利者(支配者)としての栄冠を与えられて行きます。しかし、それは惑わしです。やがてその平和は破綻します。特に後半の三年半に当たる大患難時代には偽りの平和は破綻します。

黙

6:3 小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい」と言うのを聞いた。

6:4 すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。

●**第二の封印**が解かれて出て来たのは、火のように「赤い馬」(6:4)です。「赤い馬」の「赤」は流血、殺戮を誘導する戦争を意味しています。この赤い馬の騎手には「大きな剣が与えられた」とありますが、これは大きな戦争が起こることを意味します。巨大な剣によるが広範囲な破壊を象徴しています。地上から平和を奪い取ることが許され、そのために、人々は互いに殺し合うようになります。イエシュアもマタイ24章で世の終わりの前兆としての戦争ことや戦争のうわさのことを預言されました。「また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」(マタイ24:6~7)

●Iテサロニケ5章3節に「人々が『平和だ。もう安全だ』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それを逃れることは決してできません。」とあります。さまざまな問題が平和的な手段によってすべて解決され、世界の人々が「平和だ。もう安全だ」と考えるようになったとき、恐ろしい戦争を経験するようになるということです。

黙

6:5 小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。黒い馬であった。これに乗っている者は量りを手に持っていた。

6:6 すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言うのを聞いた。「小麦一拵は一デナリ。大麦三拵も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」

●**第三の封印**が解かれて出て来たのは、「黒い馬」(6:5)です。黒い馬の騎手は量りを手に持っていました。この「量り」が何を象徴しているのかと言えば、とても家族を養うだけの食糧が得られない、極度のインフレ、物価の高騰、食糧の飢饉になることを意味します。「小麦一拵は一デナリ」は人が一日に食べる小麦の分量と言われます。それが一デナリということは、人が一日一生懸命に働いても、自分の食べる分しか買うことができない物価高騰を意味しています。つまり、黒い馬の騎手によって飢饉が世界規模の広がりを持つと考えられます。

●「オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない」という意味は、いろいろな解釈がありますが、おそらく使用の

制限がなされると考えられます。あるいは、医療的な領域における制約も起きる可能性もあります。

黙

6:7 小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい」と言うのを聞いた。

6:8 私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、そのあとにはハデスがつき従った。彼らに地上の四分の一を剣とききんと死病と地上の獣によって殺す権威が与えられた。

●**第四の封印**が解かれて出て来たのは、「**青ざめた馬**」(6:8)です。「青白い緑の馬」とも訳せます。この馬の騎手の名は「死」といい、そのあとには「ハデス」がつき従っています。「青ざめた馬」とは恐怖の象徴です。死刑執行者としての彼らには、世界全体の 1/4 を剣とききんと死病(疫病)と地上の獣(複数)によって殺す権威が与えられています。そのことで、人々は恐怖を感じるようになるはずで

\*\*\*\*\*

●ちなみに、ここまで、最初の四つの封印が解かれた時に出現した四つの馬のヴィジョンは、旧約聖書のゼカリヤ書 6 章 1~3 節と非常に類似しています。しかし、その内容は異なっています。

黙

6:9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。

6:10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

6:11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。

●**第五の封印**が解かれたとき、「白い衣が与えられた殉教者たちのたましい」が現われたとあります(6:9~11)。患難時代において、信仰のゆえに殉教する聖徒たちが起こります。血の復讐を求める彼らに対して、「あなたがたと同じように殺される人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡されます。

●ここで、マタイの 24 章 32 節~25 章 30 節までを読みましょう。そこには患難時代に神に仕える人々のための戒めが記されているからです。特に、有名な 25 章の「十人の娘」のたとえ話は、その前の 24 章を受けて、患難時代のことを教えています。神のことばのためにいのちをささげなければならない時代に、ある人々は用意ができていて、ある人々は用意ができていないことを教えているのです。

黙

6:12 私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血ようになった。

6:13 そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。

6:14 天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。

6:15 地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、

6:16 山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまって

くれ。

6:17 御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

● **第六の封印**が解かれたとき、「大きな地震」が起こった(6:12~17)とあります。地震だけでなく、「太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになる」とは、自然界においても大きな異変が起こることを告げています。人々も世の終わりが来たと思って恐れるようになります。

## 7章

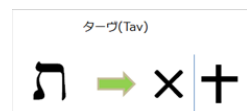
●6章においては、第一から第六までの封印が開かれ、患難時代における恐ろしい出来事が記されていました。8章で第七の封印が開かれる前に、7章では患難時代において神に守られる「**14万4千人の人々**」、および、救われた「**大ぜいの群衆**」のことが記されています。

### 1. 患難時代に神に守られる「14万4千人の人々」(7:1~8)

●前者の人々は、御使いたちによって、額に印を押された神のしもべたちのことで、文字通り、イスラエルのあらゆる部族を意味しています。額に印を押された彼らは、御使いたちによって患難時代の中で守られ、救われる者たちです。「額に印を押される」という表現はエゼキエル書9章4節にもあります。

9:4 【主】は彼にこう仰せられた。「町の中、エルサレムの中を行き巡り、この町で行われているすべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」

●御使いの務めは、偶像礼拝を悲しみ、正しく生きることを求めた人々の額に「しるし」をつけることでした。この「しるし」をつけられた者はさばきを免れることができました。



た。この「しるし」が額についている者だけが、さばかれる多くの者から区別され、かつ守られたのです。ここで「しるし」と訳されたヘブル語は「ターヴ」(טָוּ)で「符号」を意味します。旧約では3回しか使われていません(ヨブ 31:35/エゼキエル 9:4, 6)。動詞の「しるしをつける」は「ターヴァー」(טָוּ)で、いずれもエゼキエル9章4節にあります。額につけられた「しるし」はおそらく古代ヘブル文字の「×」、あるいは、「+」という符号であったかもしれません。なぜ「ターヴ」だったのかということについてはいくつかの説があるようですが、以下の二つの理由が考えられます。

(1) 「ターヴ」はアルファベットの最後の文字であることから、最後まで神に対して献身的な信仰生活を送っていたことを示すしるし。

(2) 「ターヴ」は「トラー」(טָוּר)の頭文字であることから、律法に従って歩む者であることを示すしるし。

●上記の解釈は、以下の箇所に見られる「**しるしの思想**」とも関係しています。いずれも「保護としてのしるし」「救

いの保証としてのしるし」ですが、旧約の場合、「しるし」のヘブル語は「オート」(אֹת)が使われています。

- (1) カインにつけられた一つのしるし (創世記 4:15)
- (2) モーセが神から遣わされたことを示す「臨在の約束」(わたしはあなたとともにいる)と「杖」の二つのしるし  
(出エジプト記 3:12、4:1~9)
- (3) 門のかもいに塗られた小羊の血のおおい (出エジプト記 12:22)
- (4) 主が命じられたことばを「しるしとして手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい」ということ(申命記 6:8)
- (5) 神のしもべたちの額に押された印 (ヨハネの黙示録 7:3, 4)
- (6) 額に神の印を押されていない者だけがさばきを受ける (ヨハネの黙示録 9:4)

●旧約聖書での「しるし」はヘブル語の「オート」(אֹת)で 79 回使われています。また、新約聖書での「しるし」はギリシア語では二つの言葉が使われています。ひとつは、7 章 3, 4 節にある動詞「印を押す、刻印を押す」の「スフラギゾー」(σφραγίζω)で 15 回、もうひとつは、9 章 4 節にある名詞「印、封印」の「スフラギス」(σφραγίς)で 16 回です。ちなみに、13 章 16 節に使われている獣の「刻印」の原語は「カラグマ」(χάραγμα)で、その「刻印」は人々の右の手か額かに受けさせられます。この獣の「刻印」を受けた者は、決して救われることはありません。黙示録 22 章 4 節には「聖なる都、新しいエルサレム」においては、神の御顔を仰ぎ見る神のしもべたちの額には「神の名がついている」とあります。原文には「ついている」ということばはありませんが・・・。

●額に神の印を押された者たちは、「天の御国を受け継ぐ幸いな者たち」です。彼らは、文字通りのイスラエルの民であり、各々 1 万 2 千人ずつからなるイスラエルの 12 の部族のことです。不思議なことに、7 章 5~8 節にあるそのリストの中には、ダン部族の名前が除外されています。その理由は聖書には記されていませんが、ひとつの説として、ダン部族から偽メシア(反キリスト)が出現するからだとしています。その根拠は、士師記 18 章 27~31 節でダン部族が最初に偶像礼拝に陥った部族だからということにあります。しかし、メシア的王国(千年王国)の到来を預言しているエゼキエル書 48 章では、イスラエルの約束の地におけるそれぞれの割り当て地の最初に(2 節)に、ダン部族の名前があるのです。

●ちなみに、歴代誌の系図にもダン部族の名前が記されていません。歴代誌が書かれたのは、バビロンから帰還した後の事で、この頃のダン部族はイスラエルの十二部族から除外されていたということになります。いずれにしても、十二部族の中で最も神さまから遠い存在になったダン部族ですが、彼らは千年王国の始まる時には十二部族の筆頭としてその名前が再び刻まれています。士師の時代から数えて三千年もの間、異教の偶像礼拝者へと身を落としたダン部族のことを、神は見捨てることなく、最後に彼らの相続地を用意してくださるとは何という神の真実な愛でしょうか。

●千年王国では、「国は一瞬にして生まれる」ことがイザヤ書 66 章 8 節に預言されています。「だが、このような事を聞き、だが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で産み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ。」と。驚くべきことに、死んで枯れた骨同然の民が、一瞬

にして新しく生まれるのです。これはエゼキエル書 37 章の「枯れた骨の幻」とリンクします。現在の不信のイスラエルを核として次第に骨組みが出来上がって行くということではなく、ある日、一瞬にして、イスラエルが生き返るのです。それは患難時代の終わり、キリストの地上再臨の時に実現します。

●話を元に戻しますが、御使いたちによって額に神の印を押されたイスラエルの民 14 万 4 千人は、神の守りの中にありながらも、未曾有の大患難を経験しなければならないのです。それは「こうしてイスラエルはみな救われるのです。」(ローマ 11:26)とあるように、イスラエルの民が「恵みと哀願の霊」によって新しく生き返るためです。イスラエルに対して神が約束されたことはすべて成就されます。ダン部族も例外ではありません。まさに、「罪の増し加わるところには、恵みも満ち溢れました。」(ローマ 5:20)ということが成就するのです。

●「14 万 4 千人」という表現は黙示録 14 章にも再び登場しますが、似ている面と異なる面があります。同じ面は 14 万 4 千人という数と額に印が押されているということですが、異なる面は、7 章の 14 万 4 千人の場合は「生きておられる神の印」が額に押された人々であり、14 章の 14 万 4 千人の額には「小羊の名と、小羊の父の名」が押されている人々です。表現は異なりますが、果たして 7 章と 14 章の「14 万 4 千人」の人々が、同じ人々であるのか、そうでないのか、判断の分かれるところです。この問題は 14 章で再び取り上げることにします。

## 2. 救われた「大ぜいの群衆」(7:9~17)

●黙示録 7 章に登場するもうひとつのグループは、「白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊の前に立っている数えきれぬほどの**大ぜいの群衆**」です。彼らは地上ではなく、天上にいます。しかも、御座と小羊との前に立って、御使いたちとともに交唱しています。

大勢の群衆;「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」

御使いたち;「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」

こうした賛美形式はキリスト教の歴史における礼拝で見られます。交読文、聖歌隊のアンティフォニー、など。

ちなみに、「賛美・栄光・知恵・感謝・誉れ・力・勢い」の七項目にはそれぞれ定冠詞がついています。それはひとつひとつが重要な項目であることを強調しています。

●「白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊の前に立っている数えきれぬほどの**大ぜいの群衆**」とはだれかを、ヨハネは長老のひとりに尋ねています。すると長老のひとは、「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たち、その衣を小羊の血で洗って、白くした(者たち)」であると述べています。それゆえ、彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えており、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるとあります。

●「白い衣」を身にまとい、手には「しゅろの枝」を持つとは、純潔と勝利を象徴しています。彼らは「大きな患難から抜け出てきた者」ということはどういう意味でしょうか。「大きな患難」という言葉から「大患難」という言い方もあります。それは七年間の患難時代の後半の部分の意味することばですが、その「大きな患難(の中)から抜け出てきた」者たちがいるのです。しかも、彼らは、小羊の血で自分たちの衣を洗って、白くした者たちです。それゆえ、彼らは神の御座の前に立つことが許されます。

●7章には二つのグループが並列して叙述されていることから、一方は患難時代において地上で神に守られている14万4千人の人々、そしてもう一方には、大患難から抜け出て来て今や天上において神の御座の前に立っている人々が対照的に描かれているというのが特徴です。前者はイスラエルの残りの者たちであり、後者はおそらくキリストを信じる信仰のゆえに殉教を余儀なくされた異邦人の人々のことを示唆しているように思われます。「大ぜいの群衆」の中には、すでに患難時代に入る前に携挙された神の民たちも含まれていると考えられますが、それを含まないという見解もあります。「大ぜいの群衆」という言葉の持つイメージもそうした見解の背景にあるかもしれません。

●最後に、救われた者たちの祝福が記されている7章15節～17節の部分を、21章2～4節と比較してみましょう。

#### (1) 7章15～17節

7:15 だから彼らは神の御座の前にいて、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。

7:16 彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。

7:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。

また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

#### (2) 21章2～4節

21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

●7章と21章には、神と人とが共に住む「神の幕屋」という共通のことばがあります。「幕屋を張る」とは、神が人と共に住むことを意味します。その動詞は「スケーノー」(σκηνώ)で、新約聖書ではヨハネだけが用いている語彙です。7章と21章の異なる点は、21章には「もはや死もなく・・・」「以前のものが、もはや過ぎ去った」とあるように、そこには「永遠の御国」について記されているのに対し、7章にはそれがありません。つまり、7章は「永遠の御国」の前の時代の「千年王国」も含んだかたちで叙述されているように思われます。

## 8章

●8章 1～5節の部分に注目します。8章では第七の封印が解かれて、七つのラッパが吹く御使いが登場に、この地上に神のさばきをもたらすシーンをヨハネは見ています。1～5節はそのさばきの序奏です。

### 【テキスト】

8:1 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。

8:2 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

8:3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに入った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

8:5 それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずと地震が起こった。

●今回は、6節以降に描かれている神のさばきの前に、この箇所(1～5節)にあるさまざまな語彙をキーワードにして、瞑想してみましょう。

### (1) 天にある静けさ

●7章では、天上において大群衆の賛美の声がなり響いていました。その音声がピタリと止んで短い時間ですが、「静寂」が支配しました。「天に半時間ばかりの静けさがあった」一完全なる沈黙、聖なる静謐です。ここで使われている「シゲー」(σίγη)という語彙は新約聖書ではこのこと、使徒 21 章 40 節の 2 回しか使われていません。「シーン」と静まり返ることです。ヘブル語の新約聖書はこの「静けさ」を「デマーマー」(דממה)と訳しています。

●詩篇 65 篇 1 節に、「神よ。あなたの御前には静けさがあり、シオンには賛美があります。」とあります。原文では、「あなたに向かい、沈黙、賛美、神の、シオンで」となっています。つまり、ここでは動詞がないためにさまざまな訳が可能となりますが、「沈黙」のことばがここにあるのはとても重要です。なぜなら、「沈黙」が神への賛美をより質の高いものとさせているからです。

●私たちの信仰生活においても、「沈黙」「静謐」は、神への信頼と深く結びついています。イザヤ書 30 章 15 節

【新改訳改訂第3版】

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

●二語の漢字で表わすなら「悔改」「静謐」「平穩」「信頼」となります。「悔改」はあなたの生き方を変えるように促している言葉です。そして「静謐」これは神の前にひとりになって過ごす祈りの生活です。「平穩」これはどんなことにもあわてない冷静沈着な態度です。そして「信頼」は完全に神にゆだねる姿勢です。これらはいずれも一朝一夕にして体得できるものではありません。多くの人々はこの神の呼びかけに対





して、イザヤの時代の多くの人々が「それを望まなかった」とあるように、喜んで受け入れることができないものです。なぜなら、それは目に見えない保障であり、目に見える助けの方が安全だと思っただからです。この神への不信がやがて自分たちの国を滅ぼすことになることを警告されているにもかかわらず、神に信頼することができないのです。

- 「静謐」(静かで落ち着くこと、静まって主の声を聞き味わうこと)の重要性—それはマリヤ・スタイルの回復です。

## (2) 七つのラッパを吹く御使いたち

- ヨハネは、天にある静けさの中で、神の御前に立つ七人の御使いたちを見えています。そしてその御使いたちにそれぞれラッパが与えられました。ギリシア語で「ラッパ」は「サルピングス」(σαλπιγγίς)ですが、ヘブル語では「シヨーファール」(שופר)で、「角笛」と訳されます。

- 旧約聖書において、「ラッパ」の用途は三つありました。第一の用途は、神の合図を知らせるためのラッパです。会衆を召集したり、行進させたりするためのものでした。あるいは、主の例祭(仮庵の祭、ヨベルの年)を告げ知らせることも合図としての役割を果たしています。第二の用途は、ダビデの時代になって、神を賛美するため、楽器として用いられました。しかもラッパを吹き鳴らすのは祭司と決まっていました。第三の用途は、神のさばきを告げ知らせるためです。ヨエル書 2 章 1 節には「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。」とあります。携挙の時には「終わりのラッパ」が吹き鳴らされます。そのとき、すでに主に召された人々はよみがえり、生き残っている人は朽ちないからだに変えられて、花婿なるキリストのもとに集められます。それは上記の三つの用途の中で、第一の神の召集の合図に当たります。黙示録 8 章における七つの「ラッパ」は、第三の用途である「神のさばき」を告げ知らせるためのものです。召集ラッパと神のさばきを告げるラッパを混同すると、つまり、I コリント 15 章 52 節および I テサロニケ 4 章 16 節と、黙示録 8 章のラッパを同じものと考え、教会(クリスチャン)も患難時代を通らなければならないことになってしまいます。召集とさばきのラッパを混同してはいけません。

## (3) 「もうひとりの御使い」とは

- 黙示録には「もうひとりの御使い」という表現が多くあります。7 章 2 節、8 章 2 節、10 章 1 節、18 章 1 節、21 節です。ある人はこの御使いをミカエルとしています。「もうひとりの」という理解を、「全く別の」と理解するか、あるいは、「全く同じ」と理解するか、解釈が分かれるところですが、ここは後者と理解します。ギリシア語の「アッロス」(ἄλλος)は、同種のもの間での区別を意味するからです。ちなみに、異種の区別や相違を表わす場合は「ヘテロス」(ἕτερος)という語を使います。

- 同種の御使いですが、その務めは他の御使いと異なっています。それが 3~5 節に記されています。「もうひとりの御使い」とは、金の香炉をもって、金の祭壇の所に立つ御使いです。

## (4) 金の祭壇と金の香炉

- 金で出来た「祭壇」－おそらくここでは幕屋、あるいは神殿の聖所にある「香の祭壇」のことです。
- 旧約において、香の壇の上で香をたくことのできる資格のある者は祭司のみです。



●ひとつのエピソード

【新改訳改訂第3版】Ⅱ歴代誌 26章 16～19節

26:16 しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、【主】に対して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香をたこうとして【主】の神殿に入った。

26:17 すると彼のあとから、祭司アザルヤが、【主】に仕える八十人の有力な祭司たちとともに入って来た。

26:18 彼らはウジヤ王の前に立ちふさがって、彼に言った。「ウジヤよ。【主】に香をたくのはあなたのすることではありません。香をたくのは、聖別された祭司たち、アロンの子らのすることです。聖所から出てください。あなたは不信の罪を犯したのです。あなたには神である【主】の誉れは与えられません。」

26:19 ウジヤは激しく怒って、手に香炉を取って香をたこうとした。彼が祭司たちに対して激しい怒りをいだいたとき、その祭司たちの前、【主】の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額にツアラアトが現れた。

語幹 קטר

香の壇・・・(香の祭壇) מִזְבֵּחַ הַקְטֹרֶת

- 祭壇は「ミズベアーアツハ」 מִזְבֵּחַ ●香りは「ケトーレット」 קְטֹרֶת
- 「かおりの高い香」は「サンミーム・ケトーレット」 סַמִּים קְטֹרֶת

香 炉・・・「ミクテレット」 מִקְטֹרֶת

香をたく・・・「カータル」 קָטַר

強意形のピエル態で「香をたく」「いけにえを焼いて煙にする」  
使役形でも「香をたく」と訳される。

●「香炉」とは、東洋の「香炉」とは異なり、金で出来た火皿(平らな鉢に近い)です。おそらく祭壇の火を香壇に持ってくるための器具。香壇で立ち上る煙は祈りの象徴です。黙示録 5章 8節では「四つの生き物と 24 人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。」とあります。

●しかし、8章では、天における神の御前で御使いが金の香炉をもって香壇で香をたいています。そこでは御使いがすべての聖徒たちの祈りをささげています。「聖徒たちの祈り」とは、具体的に、どのような祈りだったのでしょうか。ここ 8章ではそれについての言及はありませんが、6章にそのヒントがあります。それは「血の復讐を求める殉教者たちの祈り」だということです。

6:9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。

6:10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」

6:11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。

●この「聖徒たちの祈り」に応えるかのように、御使いは持っていた香炉に祭壇の火を取り、その香炉を地に投げつけたとき、沈黙と静けさは破られ、「雷鳴と声といなずまと地震が起こった」のでした。そこから、七人の御使いが次付きとラッパを吹き鳴らしていき、神のさばきもたらされます。

●「香炉を地に投げつけた」行為の意味は、聖徒たちの祈りが聞かれたことを意味します。つまり、6章11節で語られた「猶予期間」が終わったことを意味します。つまり、悔い改めなかった者に対するさばきが執行されたと考えられます。

#### (5) 旧約聖書と黙示録との類似

●黙示録と旧約聖書には類似点が多くありますが、今回の箇所においてそれを見つけるとすれば、一つは「額に神の印を押されたこと」(黙示録7章)と「さばきとしての火が地に投げつけられたことです。」(黙示録8章)

●エゼキエル書9章と10章

9章・亜麻布の衣を着、腰に書記の筆入れをつけた御使いの務めは、偶像礼拝を悲しみ、正しく生きることを求めた人々の額に「しるし」をつけることでした。この「しるし」をつけられた者はさばきを免れることができました。この「しるし」が額についている者だけが、さばかれる多くの者から区別され、かつ守られたのです。

10章・神のみこころに背いて神の忌みきらうべきことを嘆き悲しんでいる人々の額にしるしをつけるように命じられたもうひとりの御使い―「亜麻布の衣を着て、腰には書記の筆入れをつけた」者が、10章では主からケルビムの間にある炭火を両手いっぱい満たして、それをエルサレムの町にまき散らすように命じられています。「炭火をまき散らす」ということは、火によってエルサレムの町が焼かれることを意味しています。

●また、御使いが香炉を投げつける行為の中に、エレミヤ書7章16節にある「猶予期間」の終わりを意味する類似点を見ることができます。つまり、とりなしの祈りの猶予期間です。

エレミヤ書7章16節

あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ。

- 8章6節以降に注目します。第一のラッパが吹き鳴らされ、いよいよこれから地上に未曾有の災難がふりかかります。ただし、その災害はみな 1/3 であることに注意!!



【第一の御使いのラッパ】(8章7節)

「7 第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。」

- ここは、出エジプト記 9章 18～26 節にある第七の災害と関連があります。

<p>第七の災害 (雹)</p>	<p>9:13~35</p>	<p><b>新局面</b>・・人命を奪う災害がはじまる。 これまでの災害は地上のものによって もたらされたが、以後は、モーセの杖に よって、天からもたらされる(9:23)よう になる。「手」と「杖」はここでは同義。 9:29, 33/10:12, 13,22 参照。 この災害はエジプト建国以来なかった 激しいものだった。</p>	<p>同上</p>
----------------------	----------------	---	-----------

※ 「**新局面**」とあるのは、ここからエジプトの歴史において前代未聞の災害が引き起こされることを意味します。いわば国家経済への破壊力がきわめて大きい天災です。

- 9:18 さあ、今度は、あすの今ごろ、エジプトにおいて建国の日以来、今までになかったきわめて激しい雹をわたしは降らせる。
- 9:19 それゆえ、今すぐ使いをやり、あなたの家畜、あなたが持っている野にあるすべてのものを避難させよ。野にいて家へ連れ戻すことのできない人や獣はみな雹が落ちて来ると死んでしまう。』
- 9:20 パロの家臣のうちで【主】のこぼを恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた。
- 9:21 しかし、【主】のこぼを心に留めなかった者は、しもべたちや家畜をそのまま野に残した。
- 9:22 そこで【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸ばせ。そうすれば、エジプト全土にわたって、人、獣、またエジプトの地のすべての野の草の上に雹が降る。」
- 9:23 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、【主】は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。【主】はエジプトの国に雹を降らせた。
- 9:24 雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。
- 9:25 雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至るまで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち砕いた。
- 9:26 ただ、イスラエル人が住むゴシエンの地には、雹は降らなかった。

【第二の御使いのラッパ】(8章8～9節)

「8 第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。9 すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。」

- 第二の御使いのラッパでもたらされる災害は「海」に対する災害です。こうした災害をすべて象徴的に理解しよう

とする人々は、「山」をある種の人間的な政府とし、「海」をローマ帝国とし、滅ぼされた「舟」を教会、あるいは宗教的組織と解釈します。しかし出エジプト記と同様、神のすべてのさばきは間違いなく、字義通りに解釈すべきです。たとえば、「血」は、ナイル川の水が血になった奇蹟があります(出エジプト 7:20)。「火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた」ことで、文字通り、海水が汚染されて、海の生き物は死にます。また海を行きかう船も大きな被害を受けます。船舶、漁業、水産関係に大きな被害がもたらされます。

#### 【第三の御使いのラツパ】(8章 10～11節)

「10 第三の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。」

●ここでも象徴的に解釈する人々は、「大きな星」を反キリストかサタンのような人物を意味するとし、「水」は地上の人々と解釈します。しかしここも字義通りに解釈すべきです。ここでの「大きな星」とは単数です。この星の名前は「苦よもぎ」と呼ばれます。以前、チェルノブイリで原子炉の爆発があり、多くの人々が放射能を浴びましたが、その「チェルノブイリ」という地名が「苦よもぎ」を意味することから、この「大きな星」を核爆発とその結果発生する災害と考える解釈があります。しかし黙示録のさばきはこれから起こる出来事です。チェルノブイリの事故は警告的・象徴的に出来事として理解することも出来ます。しかし、原則は字義的解釈すべきです。いずれにせよ、水は生命の源ですから、水が汚染されることはライフラインを断たれることを意味します。

●旧約聖書において、「苦よもぎ」が神の刑罰であること示唆している箇所があります。

①エレ 9:15 それゆえ、イスラエルの神、万軍の【主】は、こう仰せられる。「見よ。わたしは、この民に、

苦よもぎ(「ラーナー」 לַעֲנָה)を食べさせ、毒の水を飲ませる。」(原文には「毒」ということばはありません)

②エレ 23:15 それゆえ、万軍の【主】は、預言者たちについて、こう仰せられる。「見よ。わたしは彼らに、

苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がったからだ。」

#### 【第四の御使いのラツパ】(8章 12節)

「12 第四の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。

13 また私は見た。一羽の鷲が中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわざいが来る。わざわざいが来る。わざわざいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラツパを吹き鳴らそうとしている。」

●第一のラツパが「地の木と草」、第二のラツパが「海の生き物と船」、第三のラツパが「川・水源」と関係がありました。これらの1/3が破壊されるだけでも大変なことです。それに加えて、第四のラツパが吹き鳴らされると、天の光の1/3が崩壊します。すべて自然界にある恵みに関係しています。私たちは自然界にある神の恵みを当然のもののように考えますが、これらのものが失われはじめるとき、その恵みの大きさにはじめて気づかされるに違いありません。しかし、だれもがそのことに気づいた時には遅いのです。

●これら、第一から第四までの神のさばきは序の口です。大激変をもたらすさらなる災いがこれから来ようとしています。それは、9章 1～12節にある「第五のラツパのさばき」、9章 13～21節にある「第六のラツパのさばき」、そして、11章 15節から展開される、「七つの鉢」と呼ばれる「第七のラツパのさばき」です。